18-6　授業解題

島名：グローバル・ヒストリー

教科（領域）：歴史
単元（教材）：「「近世の日本」ヨーロッパ人の来航と信長」
対象：附属桃山中学校１年３組

授業者：秋山雅文　先生

1. グローバル・スタディーズの観点からみた本授業の「強み」

〇本授業は附属桃山中学校の一年次の「歴史」で行われた「中世から近世へ」（全８時間）のうち第３・４時間目に相当する単元「ヨーロッパ人の来航と信長」の前半にあたる。16世紀、日本では石見銀山を中心に銀の増産がおこり、やがて銀を求めてヨーロッパ人が日本に来航した。かくして日本人ははじめて本格的にヨーロッパ人と出会い、鉄砲やキリスト教など様々な刺激をうけつつ、織田信長・豊臣秀吉が統一権力として現れ、近世社会が成立する。本授業では、ヨーロッパ人の「大航海」による「世界の一体化」を紹介した直前回をふまえ、それに対して日本がどう向き合ったのかがテーマとなる。世界史的視野でもって日本史を考えるグローバル・ヒストリーの典型的な学習テーマといえる。
〇中学校における「歴史」の授業は、あくまでも日本の歴史が中心で、世界史の動向は日本と関わるところを中心に紹介される。そのため、世界史・日本史の総合化といっても、多くの場合、日本の「対外関係」に関わるトピックを取り出すことに終始しがちで、結果として「対外関係」に関わる事象は日本史の「本筋」とは関係ないものと認識されがちである。あるいは、そうならないようにとの意識が過剰になり、列島外からのインパクトを過大に評価してしまう場合もまま見受けられる。それに対して、本授業は、南九州地域の戦国大名・島津氏の戦略やそれを規定する諸課題として、領国の統治やその拡大のための戦争とヨーロッパ人との関わりとを併置することで、島津氏にとって領国（さらには南九州地域）支配と日本国外の勢力との交渉が等しく「自分ごと」であったことが意識されている。これにより、日本史・世界史を別の領域とみなす発想を克服する視座が開かれることになる。

2. グローバル・スタディーズのカリキュラム開発にむけて

〇本授業の独自性としては、「シミュレーション」の手法を導入したことにある。これにより、生徒は、歴史事象の因果関係などに疑問（なぜ、自分の選択が国力の増大につながったか、など）をもち、また楽しみながら考える（どうすれば、よりよい選択ができるか、など）ことができる。また、戦国大名に自身を重ねることで、大名をとりまく環境についても想像力を働かせることができる。これはグローバル化する時代・社会のなかで問題を自分事としてとらえ、課題をよりよい方向に導くという姿勢を育成する点でも重要である。

〇このように意欲的かつ魅力的な授業ではあるが、課題がないわけではない。たとえば、「授業の構想」に、「戦国時代は国内の争いが中心であり、ヨーロッパ人との関わりは最優先の事項ではなかった」とするが、これは一つの仮説や立場としてそれ自体検証されるべきもので所与の前提とはできない。また、中学１年生向けの授業であることを意識し、一部に歴史的な事実とは異なるディフォルメ（説明のための方便）がみられるが、本授業が生徒に与えるインパクトを考慮するならば、改善・議論の余地も残されている。しかし、これらは今後の課題として大学・付属学校間の協働などを通じ、考えていくべき課題である。なお、本時は通常授業の一コマとして 50 分で実施した（ゲーム後の考察は次回の授業で行う）が、判断や考察のための時間を確保するには連続する２コマなどで実施するといった方法もありえよう。また、附属桃山中学校の生徒は以前にもこうした形式の授業を経験しており、一定度の慣れがあることも付言しておく。